

—— 統合失調症ががんの治療に与える影響 ——

## 院内がん登録情報および DPCデータを用いた多施設後方 視的研究実施にあたっての予備調査

YAMADA Yuto  
山田 裕士  
岡山大学病院



最優秀  
口演賞

この度は、日本がん登録協議会第33回学術集会 in 島根にて、最優秀口演賞という栄えある賞を授与いただき、大変光栄に存じます。この場をお借りして、ご指導いただいた共同演者の先生方、研究実施にあたって多大なご協力をいただいた岡山大学病院がん登録室ならびに診療情報管理室の皆様にご礼申し上げます。

代表的な精神疾患である統合失調症患者では、精神障害の無い者と比べてがんの死亡率が高いことが知られています。その背景として、がんの診断や治療などの各診療場面において格差が生じていることが海外では多数報告されていますが、我が国においては、診断時のがん進展度やがん治療に対する精神疾患の影響についての知見は限られます。我が国の単独のデータベースでこれらの格差を明らかにすることは困難であり、がん登録情報とDPCデータ等の複数のデータベースを突合して初めて可

能となります。今回我々は、多施設調査に向けて院内がん登録とDPCデータを利用するデータ収集手順書を作成し、岡山大学病院単施設での研究実施可能性を確認しました。結果として、データ収集手順書で計画した全ての変数の収集およびデータ集計が可能であることが確認できました。また、解析対象となったサンプル数は、2011年4月～2021年12月までの約10年間で、大腸がん1368例、胃がん1872例、肺がん2299例、乳がん2433例、子宮頸がん604例であり、統合失調症の併存を認めた症例は各がん4～8例（併存率0.21～0.99%）でした。これは我が国の統合失調症患者の有病率（0.59%）を考慮しても妥当な数値と考えられました。本予備調査で作成した手順と結果を踏まえ、次のステップとして大規模な多施設調査の計画を進めております。

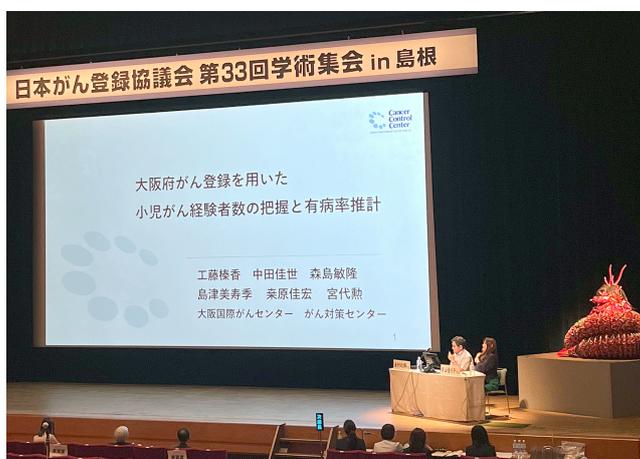
## 大阪府がん登録を用いた 小児がん経験者数の把握と 有病率推計

KUDO Haruka  
工藤 榛香  
大阪国際がんセンター



優秀  
口演賞

この度の日本がん登録協議会第33回学術集会で、優秀口演賞をいただきました。本研究は、大阪府がん登録を用いて、小児がん経験者数の把握や有病率を推計したものです。小児がん経験者数（有病数）は基準となる時点で死亡情報が得られていない数と定義し、1975～2019年に診断された小児がんを対象としました。最終解析対象となった8,186人のうち、2019年末時点で5,252人が生存しており、これは、100万人あたりの粗率で883、年齢標準化率で987に相当しました。5年有病率（年齢標準化、100万人あたり）は194（1979年）から417（2019年）に増加し、年平均変化率は+1.9%でした。10年有病率は391（1984年）から715（2019年）に増加し、



年平均変化率は+1.7%でした。多くの小児がんの生存率が改善したことなどにより、5年・10年有病率は増加傾向であると考えられました。小児がんの種類は、白血病（n=1,559, 30%）、中枢神経系（n=996, 19%）の順に多く、2019年末時点の年齢は15～39歳のAYA世代（n=3,056, 58%）が半数以上を占めました。小児がん経験者数に関する報告が限られている中、人口規模が大きく、長い歴史を持つ大阪府がん登録を用いることで、このようなテーマに取り組むことができました。

最後になりましたが、がん登録業務に携わるスタッフの皆様、ご指導いただきました先生方に心より感謝申し上げます。これからもがんサバイバーシップ支援に繋がられるよう、がん登録業務や研究に真摯に取り組んでまいります。